そだちのねっこ

～乳幼児期の遊びより～

教育センター所報
10月号掲載

「これなあに？」「あれなんだ？」「いってみようかな？」
～大人が安心の基地としてあり続けるわけ～

9月4日（水）、0歳児の子どもたちが遊ぶ様子を見学してきました。

テラスでは、ジョーロに水を入れてジャ～っと流して、保育者を見ています。保育者の優しい笑顔と「お水、気持ちいいね～」「ジャ～できたね」の声を聞き、再び水遊びを楽しむ子どもがいました。

室内では、絵本を見ながら絵を指さして、保育者を見ています。「ワンワン」「りんご」「元気もりもりです」など、答えてくれる保育者の反応を確かめながら、絵本をめくる子どもの姿が見られました。また、保育者が「ここまでおいで～」と人形を使って誘いかけると、自分で段差を上り坂道を滑った後、保育者を見て、手をパチパチさせ自分でできた喜びを分かち合っていました。

牛乳パックで作られたおうちに入り、向こう側が見えるか見えないかの絶妙なのれんから、「ばあ！」と顔を出して、保育者にアピールして笑顔で繰り返し遊ぶ姿もありました。

さらに、食事の場面では、大きな口を開けて食べる姿、自分で食べようとする姿があり、対面の保育者に「おいしいね～」「もっとたべる？」など声をかけられていました。食材を見て、触って、匂って、味わって五感をフルに使っている姿が、とてもかわいらしくて、見ている私も同じように「あ～ん」と口を開けてしまうほどの居心地のよさを感じました。

どの姿にも共通しているのは、遊んだり、行動したりした前後には必ず大好きな保育者の【顔】を見ることです。これは、4月に入園し、新しい環境に慣れずに不安でいっぱいだった子どもたちが、担当保育者の寄り添ったかかわり、温かいまなざしと声かけによって、『安心基地（保育者）』と感じられるようになったという証です。

『安心基地（保育者）』がいるという安心を感じることで、自分から『外の世界』へ行こうとする気持ちが芽生えます。【『安心基地と外の世界』を行ったり来たり繰り返すこと＝『安心感の輪』】こそが、生涯発達の土台となるため、とても重要になってきます。

また、『外の世界』では、発達年齢に合った、心をくすぐる環境や玩具の準備、保育者のかかわりや声かけが大事になります。音が鳴る・なめても口に入れても安心・指先や手を使って遊べる玩具・少しの段差を上り下りや伝い歩きができたり、自由に全身を使えたりする環境など安全面も考慮し、遊びを通して発達を促していきます。

まだ言葉を発しない0歳児であっても、今日の見学で見られた、保育者の自然な声かけが安心感とともに、発語にもつながるとわかりました。また、自発的な『遊び』こそが『学びの芽』であることも確認できました。

【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】に関連させてみると、『健康な心と体』『自立心』『豊かな感性と表現』につながる芽生えがありました。